

## 忘罪術 其三 オプチミスム(樂天教) 附ユテリヤン教并に「新神学」

主樂説不可思議説は基督教の正反対主義なり、前者の後者と相離るゝの遠きや余は一躍して心靈の志望を棄卻し拜すべきの神を有せざ永遠の希望を與へざる所謂豚慾哲學(<sup>とんよく</sup>Pig philosophy)を抱持するの膽力を有せざりしなり、エホバの恩惠ふかきを嘗<sup>あじは</sup>ひしものにして純粹不可思儀説を抱持するに至りしものは余は未だ曾て聞かざるなり、唯物論に接して容易に宗教感念を去りし人は未だ宗教を感じざりし人なり、宗教は大事實 <sup>[<sup>一〇</sup>]</sup>なり、斯大事實 <sup>[一〇]</sup>を識認<sup>しきにん</sup>抱括<sup>はくかつ</sup>せざる哲學は偏頗<sup>へんぱ</sup>哲學なり。

然れども此處に唯物論の如く粗暴ならず、又基督教の如く厳格ならず、而かも宗教的の希望と理想とを供し、物と云はず靈と云はず、萬有が神なるか神が萬有なるか之を判別せざるのみならず判別せざるを以て卻て高尚優美なりと自稱する學説(?)あり、此學派或ひは「オプチミスム」と云ひ、或はエモルソン主義と云ひ、或は變遷して「新神學」と稱することあり、其罪惡問題を解明するや單純にして簡易なり、曰く善は治<sup>あまね</sup>くして惡は局部なり、否な惡なるものは善の變現<sup>へんげん</sup>にして惡てふものゝ存する事なし、見よや腐骨も肥料として草樹に施せば百合花となり無花果<sup>いぢじく</sup>となりて目と口とを歡ばすにあらずや、惡あればこそ善あるなり、根の幹に於けるが如く、惡とは善の本にして善ある限りは惡なかるべからず、故に惡を惡と思ふ勿れ然らば直ちに惡より脱するを得ん、ノバリスト曰く

人若し直ちに意を決して己は善(moral)なりと心を定むれば彼は實に善たるを得るなり

と、罪惡とは人の妄想にして罪惡を斷つは之に關する思惟を變ずれば足れり

結論或は此に至らざるも惡を脱するの道として唯善のみに注意するの法あり、曰く善なれ然らば惡ならざるべし、曰く神は愛なれば汝の罪を責め玉ふの理なし、人靈の墮落未來の刑罰共に中古時代迷信家の妄想にして十九世紀の學術は已に之を排除せり、汝の稱する罪なるものは尙ほ進化の中途にある人類の不完全を云ふものなり、汝に未だ下等動物の情(じよう)性存するあり、汝の之を脱するを得るに至るは尙ほ數千萬年の後人類が進化の極度に達する時にあり、汝が完全ならんと欲する慾望は蛙が空中に飛翔せんと欲するが如き、馬が後足のみにて歩まんとするが如き、馬鹿らしき希望なり、過(あやま)つは人なり、薄弱なる之を女と云々、若し不完全なるを以て罪なりと云はば全能者を除くの外は罪なきものゝ存する理なしと、樂天教と云ひ、ユニテリヤン教と云ひ、又は一派の「新神學」と云ひ、其説く處稍や相異なる事なきにはあらざれ共其類似する處は一なり、即ち罪てふ感念を輕過するに非ざれば之を處置するに於て純粹基督教の如く嚴重ならざるにあり。

惡は惡と思はざれば惡ならざるべしとの想像は或る一種の信仰治療家が病を病と思はざれば直ちに癒ゆべしと主張するが如し、然ども此種の治療の至難とする處は病を病と思はざらしむるにあり、我の血熱卅度に達し、眼閉ぢ口腫れ手足痺痺する時何物か我は病まさるものなりと信せしむる者あらんや、我の病むは事實なり、然るに我は病まずと信ぜんとす、我若し癒ゆるが爲めにかく信ずるならば是僞信にして信仰ならざるなり、勿論世には神經病なる者ありて其苦痛の原因は單に誤想に存するあり、此場合に於ては思考を癒すは病を癒すなり、若し罪てふ觀念は單に病意の夢想に止つて確なる事實ならざれば之を意に介せざれば之より免かるゝを得るなれど

も、罪は事實の事實にして我若し之を思はざれば我は之が爲めに亡ぼさるゝなり、聞く駝鳥が獵師に追跡せらるゝやその終に免るゝ能はざるを知れば其頭部を砂中に填め以て全身を隠せしことゝ自信し容易く捕獲さるゝに至ると、思想の中より罪なる觀念を脱して全身已に罪より脱せりと考ふる人は實に此駝鳥の愚を學ぶものなり、世の稱して以て罪となすものゝ中に罪ならざるものありとするも罪てふ觀念を生ずるに至らしめしは身に罪ありて后しからしめしにあらずや、罪より脱して後始めて罪を思はざるに至る、罪を思はずして罪より脱するにあらず。

善のみを慕へば自然と惡より脱すべしとの想像は幾分かの眞理を包含せざるにあらず、其子を呵嘆するを見て讃譽する事を知らざる父母は無智無情の父母なり、怠るなけれと責むるより學べば賞ありと勵ますにしかず、信徒の缺點を算へ上げてその信仰薄きを責め立つれば信徒は復活すべしと信ずる牧師は未だ心靈の組織を知らざる人なり、律は殺し靈は活す、惡を避けしむるには善を知らしむるにしかず。

然れども世には姑息なる父母ありて幼兒の發育を誤るもの歟(すくな)しとせず、ルーテル謂へるあり曰く、育兒法の祕訣は一手に美果を持ち他手に鞭を持つにありと、賞譽のみを以て子を教んとする父母は其子を愛せざる父母なり、ソロモン曰く「鞭をくはへざる者はその子を憎むなり、子を愛する者はしきりに之をいましむ」と、フキリップ＝ブルックス謂へるあり曰く、三度神の慈悲を説いて一度神の嚴(きびき)を説くことを怠る勿れと、恩恵のみを説いて刑罰を説かざる牧師は眞實に教會を愛せざる牧師なり、鞭と共にならざる美果、刑罰と合せざる慈悲は賞譽にして賞譽ならず、恩恵にして恩恵ならず、暗を知らざる光、貧を知らざる富、死を知らざる生は我その何物

たるかを知る能はざるなり。

然らば善、善たらんが爲めに惡惡たるか、惡の存するなくして善は存する能はざるか。

然り、然らず、善は善にして惡は惡なり、然れども善の善たるを知覺せんが爲には先づ惡と接せざるべからず、生命の樹のみを以て植へ付けられたる園は人類を鍛鍊進歩せしむるに足らず、善惡を知るの樹は自由の意志を有する人靈發達上の必要なり(創世記二章九節)、哲學者ライプニツツの「人類の墮落は人類を進歩せしめしに於て最大の效力を有せり」との言は蓋し此意を謂ひしならん。

或人云はん惡にして善を善たらしむるものなれば惡も亦善ならずやと、汝愚なるものよ、惡、惡たればこそ善をして善たらしむるなり、惡若し善なれば善は善ならずして止みぬ、然り罪の罪たるを知つて始めて惠の惠たるを知るなり、惡を避けずして善を慕ふ能はず、惡の惡たるを知る是れ善なり、罪惡問題を正面より攻究せざる哲學も神學も共に頼むに足らざるなり。

罪とは不完全(Imperfection)を云ふには非ざるなり、我が良心が我を責むるは我が神の如き智と力とを有せざるが故にあらず、聖書に謂ゆる天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし(馬太傳五章四十八節)とは神の絶對的の完全に達し得べしと謂ふにあらずして、神が神として完全が如く人も人として完全かるべしと謂ふなり、完全なる馬とは人の如く物言ひ人の如く思惟する馬を云ふにあらずして馬の馬たる用を完全になすものを謂ふなり、故に人に罪ありと謂ふは人が人たるべきの完全を缺ぐと謂ふにあり、基督教が義人一人もあるなしと謂ふはこの事を謂ふなり、神が我を責むるは我が雨を降し得ず日を輝かし得ざるが故にあらずして我れ人を愛すべ

きに人を憎めばなり、我怒るべからざるに怒ればなり、而して神は我が働くべき時に働くべきを責め玉ふのみならず我休むべきときに休まざれば又我を責め玉ふなり。

憤怒ふんどくは我の有する情性の一なり、我此性を有するは我は人にして天使たらざるの證なり、然らば怒るは我に取りては罪ならざるか、人あり故なくして我の權利を犯す時我怒らざるを得んや、此憤怒の情我に起る我之を罪と云はざるなり、然れども此情延ひて復讐の念となり害を以て害に報いんとするに至れば我は罪を犯せしなり、

保羅曰く

怒りて罪を犯すこと勿れ怒て日の入までに至ること勿れ

(以弗所書第四章二十六節)

然り我は容易に我の不完全と罪とを判別し得るなり。

不完全は罪ならざるのみならず不完全を認めざるは卻て罪なり、人その完全に達するやその不完全なるを以て憂慮せざるに至る、達し得べからざる完全に達せんとして思慮を勞する人は未だ完全ならざる人なり。

罪とは無學むがくを謂にあらず、無學若し罪なれば何故に醫師は不養生を以て有名なるや、何故に代言人社會に國事犯の多きや、何故に牧師傳道師は嫉妬と惡口とに富むや、智識なき小兒こそ哲學者の羨む善良の性を有するものにあらずや、野に耕し海に漁するものこそ都人の遠く及ばざる信義と誠實とを具るにあらずや、智育の普及にして罪を減し得るならば何故に僅々四百萬の人口を有するニューヨルク州に於て四千萬の人口を有する日本國にまさる多數の殺人罪を生ずるや、世に有害なるものゝ中に教育を有する野蠻人の如きはあらじ、聞く米國銅色土人の中に最も墮落するものは白哲人種の智識を有して其道德と宗教とを有せざるものなりと、希臘語ギリシャを以てホーマー

ーの著作を読み、拉典語に依てバージルの牧羊歌を謠ひしものが、その蠻族に歸りし後は淫行放埒遙に山羊水牛と共に生長せし土人の及ばざる處なりと云ふ。

ダーウキン氏の世界週航記中南米テラデルリフユエゴの土人にして英國ロンドンに於て文明國の教育を受しものが故郷に歸りし後五年を出づして他の蠻人と異なる事なきに至りしを載せり、道徳の復活は文學の隆興と共に來らざるは十四世伊國の歴史を以て、ゲーテ、シェークスピヤの言行錄を以て徵すべきなり、人の意志を動かすものは乾燥冷淡なる學理にあらずして新鮮溫暖なる感情なり、教場的の教訓にあらずして愛情的の感化なり、竊むべからずとの倫理學上の學理にあらずして竊盜罪の嫌惡すべきものたる事の宗教的の感念なり、若し倫理學的の教育にして徳義を養成し得ると雖も之消極的の感化に止り、僅かに自己を清くし害を他に加へざるに止り、博愛他に及ぼし、己を捨て他を救ふの積極的の徳義を養ふを得ず、儒教の授くる徳義スペンサー主義の徳義の冷々淡淡皆然らざるはなし、然り罪は倫理學的の智識缺乏にあらざるなり。

神の慈悲のみに意を留めて彼の刑罰を説かざる是ニテリヤン教ニバーサリスト教(宇宙神教)の特徴なり、

” There is wideness in God, s mercy

Like the wideness of the sea.”

神のなきの はかりなや

海のひのあが いとくなり

とは宇宙神教主義の柱石なり、而して神を見る事閻魔王の如く唯刑罰を人類に配布するを以て常任とするものゝ

如くに思惟する人に向ては宇宙神教の教義は多量の慰藉を與ふる事は疑ふべからざるなり、然れども正義ならざる神の愛は愛にして愛ならざるなり、愛とは慈悲のみを云ふにあらず、われ罪を犯すとも我を罰せざる政府は我の信任すべき政府にあらざるなり、赦すべき理由なくして罪人に赦免を降せば主權者の威力全く行はれざるに至る。

チャールス＝ダーウキンの祖父エラスマス＝ダーウキン常に語て曰く「ユニテリヤン教とは落ち来る信徒を受け入る爲の柔毛を以て充たしたる蒲團なり」と、是ユ教の缺點のみを摘示せし語なりと雖又能く其一斑を觀破せし語なり、ユ教徒の稱するジョナサン＝エドワードの野蠻教義(Savage Doctrines)なるもの勿論嫌ふべき處なきにはあらず、然れどもユ教の寛に過ぎるの甚だしき其教義を以て人靈深奥の希望を満足し、甚だ嚴にして甚だ優なる基督的の君子を養成し能はざるは普通觀察の徵する所ならむ。

是等は皆偽の預言なり、彼等は淺く民の女の傷を醫し平康からざる時に平康平康といふものなり(耶利米亞第一六章十四節)彼等は望を充たさざる溪川なり、テマの隊客旅シバの旅客これを望みて耻愧を取り、彼處に至りて面を赧くす(約百記第六章十五節より二十節まで)我靈の希望は我が過去の罪を赦され、我が未來を安全ならしめ、我の心に全然たる平和を得せしめ、我勉めずして神と人とを愛し得べく、善行は自然に我より流れ出で、我働きて疲れず、死して死せず、失望せず、哀へず、——即ち完全なる人となるにあり、博士ハクスレー氏曰く

“ I protest that if some great Power would agree to make me always think what is true and do what is right on

condition

of being turned into a sort of clock and wound up every morning. I should instantly close with the offer.;

若しある大力者ありて余を變じて時計の如きものとなし、毎朝發條を巻か置けば余をして勉めずして常に眞力を思ひ正を爲すを得せしむべしとならば余は直に余の身を彼に委ぬべしと、而して余の解する所に依れば基督教は人を善の器となすものにして、先哲が以て詩人の夢想と認めし最大希望を我等に充たすべしと宣言するものなり、われ基督教に由て未だ此完全に達する道を得ざればわれは未だ基督教を解せざるものなり、基督信徒は大慾を抱かざる可らず、印度宣教師ウヰリヤム＝ケリー曰く、Attempt great things for God, expect great things from God.(神の爲めに大事を計畫し、神より大事を望め)と、我は人力の及ばぬ大變動を我身に來たやんと欲するものなり。

快樂説や不可思議説は、キリスト教の考え方と根本的に対立している。これらがキリスト教とあまりにかけ離れているため、私は精神的な願いをすべて捨て、拝むべき神も永遠の希望も与えない、いわゆる「豚欲哲学」(快樂主義)を受け入れる勇気は持てなかつた。神の深い恵みを味わつた者で、純粹な不可思議説を信じるに至つた者を、私はまだ一度も聞いたことがない。唯物論に接して簡単に信仰心を捨て去つた人は、まだ宗教を感じていなかつた人である。宗教は大変重要な事実であり、この重要な事実を認識し受け止めない哲学は、偏つた哲学とされている。

しかし、ここには唯物論のように荒々しくはなく、またキリスト教のように厳格でもないのに、宗教的な希望と理想を提供する学説(?)が存在している。これは、物質か靈か、宇宙全体が神か神が宇宙全体かという区別をしないばかりか、その区別をしないことこそが高尚で優美であると自ら称している。この学派は、「オプチミスム」(樂天主義)と言われることもあり、後には「新神学」と称される場合がある。その罪悪問題を解明する方法は単純で容易である。彼らは、善はあまねく存在し、惡は部分的なものであり、いや、惡といふものは善が変化して現れた姿であつて、惡そのものは存在しない、と論じる。見てみよ、腐つた骨も肥料として草木に与えれば、ユリの花やイチジクの実となつて、目と口を喜ばせるではないか。惡があるからこそ善があるので、根が幹にあるように、惡とは善の根本であり、善がある限り惡がなければなら

ない。ゆえに悪を悪と思うな、そうすれば直ちに悪から脱することができるであろう、と。ノバリストはこう述べている。

人がもし直ちに意を決して己は善（道徳的）であると心を定めれば、彼は実に善たるを得るのである。と。罪悪とは人の妄想であり、罪悪を断ち切るには、それに関する考え方を変えれば十分であるとされている。あるいは、たとえこのような極端な結論に至らなくとも、悪から脱する方法として、ただ善のみに注意を向ける方法がある。曰く、「善であれ、そうすれば悪ではないだろう」と。曰く、「神は愛であるから、あなたの罪を責める道理はない」と。人間の魂の堕落も未来の刑罰も、共に古い時代の迷信家の妄想であつて、十九世紀の学術は既にこれを否定したとされている。あなたが罪と呼ぶものは、なお進化の途中にある人類の不完全さを言うものである。あなたにはまだ下等動物の本能が残つており、あなたがこれから脱することができるようになるのは、人類が進化の極みに達する数千万年後のことである。あなたが完全であろうと欲する欲望は、カエルが空中に飛び上るうとするような、馬が後ろ足のみで歩こうとするような、馬鹿げた希望である。過ちを犯すのは人間であり、薄弱な者を女性と呼ぶ。もし不完全であることをもつて罪であるとするならば、全能者を除くほかは罪のない者が存在する道理はない、と。楽天教と言い、ユニテリヤン教と言い、または一派の「新神学」と言い、その説くところは多少異なることがないわけではないが、その似ている点は一つである。すなわち、罪という概念を軽視するか、さもなければその処理において純粹なキリスト教のように厳重ではないという点である。

悪を悪と思わなければ悪ではないだろうという想像は、ある種の信仰治療家が、病気を病気と思わなければ直

ちに治ると主張するのに似ている。然るに、この種の治療が最も困難とする点は、病気を病気と思わせないよう<sup>1</sup>にするところにある。私の熱が40度に達し、目が閉じ、口が腫れ、手足が麻痺するとき、何が私に「私は病んでいない」と信じさせることができるだろうか。私が病んでいるのは事実である。それなのに、私は病んでいないと信じようとする。私がもし治るためにそのように信じるならば、これは偽りの信仰であって、眞の信仰ではない。勿論、世の中には神経病というものがあつて、その苦痛の原因が単なる誤った思い込みに存在する。この場合においては、考え方を癒すことは病気を癒すことである。もし罪という観念が単に病気の思い込みの夢に留まり、確かな事実でなければ、それを気にかけなければそれから免れることができるだろう。けれども、罪は紛れもない事実であり、私がもしそれを思わなければ、私はそのために滅ぼされるのである。聞くところによると、ダチョウが獵師に追跡されるとき、ついに逃れられないと知ると、その頭を砂の中に埋めて、全身を隠したと確信し、容易に捕獲されるに至るという。心の中から罪の意識を取り除き、それで完全に罪から解放されたと思い込んでいる人は、まさにこのダチョウと同じ愚かな振る舞いをしているのである。たとえ世間で罪と呼ばれているものの中に、本来罪ではないものがあつたとしても、そもそも「罪の観念」が生じたのは、私たち自身に罪があるからではないだろうか。罪から完全に解放された後で、初めて罪を意識しなくなるのである。罪を意識しないまま罪から脱することはできない。

善のみを慕えば自然と悪から脱するだろうという想像は、いくらかの真理を含まないわけではない。その子を叱ることだけを知つていて、褒めることを知らない父母は、無知で情のない父母である。「怠るな」と責めるより

も、「学べばご褒美がある」と励ます方が優れている。信徒の欠点を数え上げて、その信仰の薄さを責め立てれば信徒は立ち直ると信じる牧師は、まだ心の仕組みを知らない人である。「律法は人を殺し、靈は活かす」のである。悪を避けさせるには、善を知らしめるに越したことはない。

然るに、世の中には一時しのぎの指導で、幼い子の成長を誤らせる父母も少なくない。ルターは言っている、「子育ての秘訣は、一方の手に美しい果物を持ち、もう一方の手に鞭を持つことにある」と。褒めることだけでは子を教えようとする父母は、その子を愛していない父母である。ソロモンは言う、「鞭を加えない者はその子を憎むのである、子を愛する者はしきりにこれを戒める」と。フイリップ・ブルックスは言っている、「三度神の慈悲を説いて、一度神の厳しさを説くことを怠るな」と。恵みばかりを説いて刑罰を説かない牧師は、真に教会を愛していない牧師である。鞭を伴わない美しい果物、刑罰を合わせない慈悲は、賞賛であっても賞賛ではなく、恵みであっても恵みではない。暗闇を知らない光、貧しさを知らない富、死を知らない生は、私がそれが何物であるかを知ることはできない。

ならば、善が善であるために悪は悪であるのか、悪が存在しなければ善は存在できないのか。

いや、そうではない。善は善であり、悪は悪である。けれども、善が善であることを知覚するためには、まず悪に接しなければならない。「生命の樹」だけを植え付けられた園は、人類を鍛え、進歩させるには不十分である。「善惡を知るの樹」は、自由な意志を有する人間の魂が発達する上で必要である（創世記二章九節）。哲学者ライプニッツの「人類の堕落は、人類を進歩させたことにおいて最大の効力を有した」という言葉は、おそらくこの

意味を言つたのであろう。

ある人は言うだろう、悪が善を善たらしめるものならば、悪もまた善ではないのか、と。あなたは愚かな者よ。悪が悪であるからこそ、善を善たらしめるのである。悪がもし善ならば、善は善でなくなつてしまふ。然り、罪が罪であることを知つて、初めて恵みが恵みであることを知るのである。悪を避けずに善を慕うことはできない。悪が悪であることを知ること、これこそが善である。罪悪の問題を正面から深く追求しない哲学も神学も、共に頼るに足らないとされている。

罪とは不完全さ (Imperfection) を言うのではない。私の良心が私を責めるのは、私が神のような知恵と力を持つていなかつたらではあるまい。聖書に言われている「あなたがたの天におられる父が完全であるように、完全であります」（マタイの福音書五章四十八節）という言葉は、神の絶対的な完璧さに達することができるという意味ではなく、神が神として完全であるように、人も人として完全であるべきだという意味である。完全な馬とは、人のように物を言つたり考えたりする馬を言うのではなく、馬が馬としての役割を完全に果たすものを言うのである。ゆえに、人に罪があると言うのは、人が人間としてあるべき完全さを欠いているということにあたつてゐる。キリスト教が「正しい人は一人もいない」と言うのは、このことを言つてゐるのである。神が私を責めるのは、私が雨を降らせたり、太陽を輝かせたりできないからではなく、私が人を愛すべきなのに人を憎むからであり、私が怒るべきでないときに怒るからである。そして神は、私が働くべき時に働くべきのを責められるだけでなく、私が休むべきときに休まなければ、また私を責められるのである。

怒りは私が有する感情の一つである。私がこの性質を有しているのは、私が人であつて天使ではないという証拠である。それならば、怒ることは私にとつて罪ではないのだろうか。人が何の理由もなく私の権利を犯すとき、私が怒らないでいられるだろうか。この怒りの感情が私に起ることを、私は罪とは言わない。けれども、この感情が長引いて復讐の念となり、害をもつて害に報いようとするところに至れば、私は罪を犯したことになる。パウロは述べている。

怒つても罪を犯してはなりません。憤つたままで日が暮れるようであつてはいけません。

(エペソ人への手紙四章二十六節)

そう、私は自分の不完全さと罪とを容易に判別することができるるのである。

不完全は罪ではないだけでなく、不完全を認めないことはかえつて罪である。人はその完全に達すると、自分の不完全さについて憂慮しなくなるに至る。実現不可能な完全に達しようとして思い煩う人は、まだ完全ではない人である。

罪とは知識の欠如をいうのではない。知識の欠如がもし罪ならば、どうして医者は不摂生で有名であるのか。どうして弁護士の社会に国を乱す者が多いのか。どうして牧師や伝道師は嫉妬や悪口が多いのか。知識のない子どもこそ、哲学者が羨む善良な性質を持つてゐるのではないだろうか。野で耕し海で漁をする人こそ、都会の人々が遠く及ばない信義と誠実さを備えているのではないだろうか。知識の普及によって罪を減ぼすことができるならば、どうしてわずか四百万の人口を持つニューヨーク州において、四千万の人口を持つ日本よりも多数の殺人

罪が生じるのか。世に有害な者の中で、教育を有する野蛮人のような者はいないであろう。聞くところによると、米国のネイティティブアメリカンの中で最も堕落しているのは、白人種の知識を持ちながら、その道徳と宗教を持つていの者だという。ギリシア語でホーマーの作品を読み、ラテン語でバージルの牧歌を歌つた者が、その部族に帰つた後は、淫行や放蕩が、遙かに山羊や水牛と共に成長した土人の及ばざる領域であるという。

ダーウィン氏の『世界周航記』には、南米ティエラ・デル・フエゴの原住民で、英國ロンドンにおいて文明国の教育を受けた者が、故郷に帰つた後五年も経ずに、他の部族の人間と異なる者になつたと記されている。道徳の復活が文学の隆盛と共に来ないことは、十四世紀イタリアの歴史や、ゲーテ、シェイクスピアの言行録をもつて証明すべきである。人の意志を動かすものは、乾燥して冷たい理論ではなく、新鮮で温かい感情である。教室での教訓ではなく、愛情による感化である。「盗んではならない」という倫理学上の理論ではなく、窃盗罪が嫌悪すべきものであることの宗教的な感情である。もし倫理学的な教育が徳を養うことができたとしても、それは消極的な感化に留まり、わずかに自分を清くし、他人に害を与えないことに留まつてゐる。博愛を他者に及ぼし、自分を捨てて他人を救うという積極的な徳を養うことはできない。儒教の教える徳も、スペンサー主義の徳も、冷たくて淡泊で、皆そうである。然り、罪は倫理学的な知識の不足ではないのである。

神の慈悲のみに心を留めて、神の刑罰を説かないのが、ユニテリヤン教、ユニバーサリスト教（宇宙神教）の特色である。

神のなきの はかりなや

## 海のひろきが ごとくなり

とは宇宙神教主義の中心的な教である。そして、神を閻魔王のように、ただ刑罰を人間に与えることだけを役目とするもののように思惟する人にとっては、宇宙神教の教義は多量の慰めを与えることは間違いない。然るに正義を伴わない神の愛は、愛であっても眞の愛ではないのである。愛とは慈悲だけをいうのではない。私が罪を犯しても私を罰しない政府は、私が信頼すべき政府ではない。赦すべき理由がないのに罪人に赦しを与えるならば、統治者の権威は全く行使されなくなってしまう。

チャールズ・ダーウィンの祖父エラスマス・ダーウィンは常に語っていた。「ユニテリヤン教とは、つまずいて落ちてくる信徒を受け入れるための、柔らかい毛で満たされた布団である」と。これはユニテリヤン教の欠点だけを指摘した言葉ではあるが、よくその一端を見抜いた言葉である。ユニテリヤン教徒が「野蛮な教義」と称するジョナサン・エドワードの教えにも、もちろん嫌うべき点がないわけではない。然るに、ユニテリヤン教の度を越した寛大さが著しく、その教義をもつて人間の魂の深い願いを満たし、大変厳格で大変優美なキリスト教的な立派な人物を養成することができないのは、一般的な観察が証明するところであろう。

「これらは皆、偽りの預言である。「彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒し、平安がないのに『平安だ、平安だ』と言つて いる」のである（エレミヤ書六章十四節）。彼らは望みを満たさない涸れた川である。「テーマの隊商はこれを目印とし、シェバの旅人はこれに望みをかける。彼らはこれに頼つたために恥を見、そこまでやつて来

て、辱めを受ける」のである（ヨブ記六章十五節から二十節まで）。私の魂の希望は、私の過去の罪が赦され、私の未来が安全にされ、私の心に完全な平和が得られ、私が努力せざとも神と人を愛することができ、善い行いが自然に私から流れ出し、私が働いても疲れず、死んでも死せず、失望せず、衰えず、一すなわち、完全な人になることがある。ハクスレー博士は言っている。

もある大いなる力が、私を一種の時計に変え、毎朝ぜんまいを巻くという条件で、常に常に真実なことを考えさせ、

正しいことを行わせることに同意するならば、私は即座にその申し出を受け入れるだろう。」

と。そして私が理解するところによれば、キリスト教は人を善の器にするものであつて、昔の賢者が詩人の夢物語と認めた最高の希望を、私たちに叶えるであろうと宣言するものである。私がキリスト教によつてまだこの完璧に達する道を得ていなければ、私はまだキリスト教を理解していない者である。キリスト信徒は大きな望みを抱かなければならぬ。インドの宣教師ウイリアム・ケリーは言つている、「神のために大いなる事を計画し、神から大いなる事を望みなさい。」と。私は人の力の及ばない大きな変化を自分の身に起こしたいと願つているのである。